■ 北海道情報大学学内報

# ななかまど

NANAKAMADO

● 目　次 ●


学長就任挨拶　三枝学長…… 2

送別の辞　木下前学長…… 3

退職にあたって…… 4～8

トピックス…… 9

海外訪問記…… 10～11

卒業するにあたって…… 12

就職状況…… 13

教職員の動向・編集後記…… 14



発　行・北海道情報大学

〒069－8585 江別市西野幌59－2　TEL 011－385－4411　FAX 011－384－0134

# 学長就任挨拶

学長　三枝（さえぐさ）　武男（たけお）

平成10年新年度に当り、この度学長を拝命しました三枝ですが就任の挨拶を述べさせて戴きます。

私は終戦直後から旧制都立工専、都立大学工学部、防衛大学校の教職を経て1988年道情報大設立準備委員、89年から本学の経営情報学部長を続けてきましたが、50年余の教職を体験し、夫々の学校の創設にたずさわって参りました。その他に非常勤講師を続けていた都立工科短大の都立科学技術大学への移行にも関与し、昭和24年の学制改革による日本の大学の旧制から現新制への移行の渦中を体験して参りました。

旧制時代は希少価値のあった大学が、現在では大学は500余り、短大と合わせると1,000余りがこの狭い日本に存在する様になりました。

国際的に見てもトップレベルの高学歴社会が出現し、明治初期の欧米式教育制度が始まって100年余で今日の繁栄を見るに至りました。

歴史的に見ると300年続いた農業社会が100年間の工業社会を経て、30年余の情報社会に移っております。その技術革新は加速度的に進渉し、めまぐるしいものがあります。

本学の創始者、松尾三郎理事長は国際状勢に先見性を発揮し、電子開発学園として電子計算機専門学校を約30年前から全国に順次9ヶ所のセンター（他に9ヶ所のサブセンター）を開設し、本学を平成元年に創設されました。

情報化社会に適応するユニークな大学としての経営情報学部を創り、情報技術のわかる経営者養成の経営学科と経営能力を備えた情報技術者養成の情報学科を設け、現在6期生までを世に送っております。その後本学の特徴であります衛星通信教育を加えた通信教育部を平成6年に開設し（学年定員1,200名）1期生を高率の就職率で世に送りました。

更に平成8年経営情報学専攻(学年定員15名)の大学院を開設し、これも1期生を世に送りました。

今年は創設10周年記念行事が開催される予定で、松尾記念館として図書館、講堂、コンピュータセンタ等を擁する建物が7月中には完成する様工事が順調に進んでおります。

通学、通信教育課程合せ約5,000名の学生が勉学に励んで居り、本学の急速な発展ぶりがうかがわれます。

今年は1つの大きな区切りの年かと思いますが、今迄の不備な点、問題点の解決を早期にはかると共に次の飛躍に向けて前進しなければなりません。

新年度に当り、258名の新入生を迎え、本学は順調に推移して居ると思います。

歴史的にも由緒のある大自然に恵まれたこの野幌の地で、この環境を活かし、創設以来の「自由と調和」の教育方針を旨に、自主性を重んずる校風は幅広い視野と柔軟な思考力、基礎的学問を身につけ、更に開発能力を養い、創造性への発展をうながすものです。

また、調和については、知性、主動性、信頼性、判断力、協調性及び道義的勇気等の諸要素についての調和のとれた個性を育成することです。

豊かな人間性、積極的で偏りのない立派な社会人としての人格を育成することです。

大学院も1期生を世に送り、12名の3期新入生が入学して参りました。

本学の学問レベル、研究開発能力推進のためにも発展が期待されます。

我国は第二次大戦後の未曽有の困難を乗り越え世界有数の経済大国になりました。平成4年頃からのバブルがはじけ、今尚経済の低迷が続いておりますが、日本人の本来の叡智とねばり強さで乗り切って行く事でしょう。

私は日頃「矜持を高く、専門を深く、常識を広く持て」を心掛けて来ました。

劣等感を持つ事なく、プライドを高く持ち、自己の専門を生涯かけて高め、昨今のような多様化社会と対応し得る幅広い常識をもつ事です。

何事も健康が基です。身体を若いうちから鍛え、クラブ活動等も積極的に参加する事を期待します。

以上、教職員、学生諸君共々本学の益々の発展に寄与される様期待します。

# 送別の辞

前学長　木下重教（きのしたしげのり）

先日、本年度3月に本学を退職または出向する諸先生の名簿を受け取った。教養課程の河西　章先生、村山　登先生、大湯佐知子先生、経営学科の小田中敏男先生、情報学科の斉藤収三先生、松本高士先生が退職される。さらに教養課程の福田都代先生（北海学園大へ）、経営学科の田中祐二先生（京都立命館大学へ）、上野継義先生（京都産業大学へ）、大島佳代子先生（奈良帝塚山大学へ）がそれぞれの大学に転勤される。これらの先生方は殆ど大学創設当初から就任された先生で本学の創設期を支えていただいた先生達である。このほか3月末に退任するが特任教授として引き続き教育に携わっていただく先生が4名おられる。

名簿から漏れていたが、実は私もこの3月退職する仲間の一人なのである。昨年の3月で任期満了を迎えたのであるが、新設された通信教育課程、大学院研究科の完成年次まで責任を全うするようにとの理事会の議により今日まで延期されていたのである。

退任の先生に対する送別の辞を書けと言われたときは、送られる身で送る言葉を述べることに困惑を感じた。しかし個人ではなくて大学を代表して述べると言う意味だろうと解釈して引き受けることにした。

退任する先生方の名簿を眺めていると、過去10年有余の歳月が走馬燈のように思い出される。緑苑ビル時代のこと、江別西野幌に新校舎が完成した後の新鮮で張り切っていた創設時代のこと、通信教育の設置や大学院の新設に奔走したときのことなどが川の流れのように去来する。教授会、教員会議、各種委員会、親交会などを通じ先生方と係り合い、交流を重ねた日々も懐かしい。不肖の私がなんとか今日まで任務を続けられたのも教職員の皆様のお陰であると思うと、情報大学のことは決して忘れることは出来ない。

本学の今日までの歴史は懐かしいことばかりでなくて悲しいこともあった。遡っていうと、昨年8月大学院研究科長眞野　脩先生を失ったし、平成6年には3月に遠藤一夫先生、5月に山口啓一先生、続いて7月に小林敬爾先生を相次いで失った。これらの先生に対する私どもの期待が大きかっただけにこの訃報は極めてショックであり、本学にとって大きな損失であった。さらに本学の創設に参画した秀島光夫先生、中野嘉弘先生は定年で退職され、澁谷先生も定年間近にして退任された。これに加え今回10名以上の初代の先生が辞められるので、合わせると創設期の約3分の1の先生が入れ替わることになる。そうして本学は新年度開学10周年の節目の年を迎える。思えば誠に感慨無量である。

「創業は易く守成は難し」という言葉がある。新たに事業を起こすことよりも、それを衰えぬように守ることの方が難しいという意味である。本学の場合創業の時代が長く続き、守成（学部の充実）に励む余裕がなかったような気がする。振り返って慚愧に耐えない次第である。

本学は21世紀情報化時代の先駆的役割をはたすことを旗印にして創立された大学である。しかし時の流れは厳しく、小子化によって大学冬の時代がくると言われている昨今である。今後益々大学の充実をはかり21世紀を担うにふさわしい大学に発展することを願ってやまない次第である。最後に今年度限りで本学を去る先生方に対して今日までのご協力とご友誼に対し深甚なる謝意を表すると共にご健勝を祈り送別の辞とする。

（平成10年3月30日）

# 退職に当たって

前教養課程教授　村　山　　登

平成元年の本学開学時からですので、満9年間も勤務したことになります。この間、人間関係にも恵まれ、本当に感謝の気持ち一杯で退職出来る幸せを噛みしめています。

9年間は過ぎてしまうと、あっと言う間の短い月日ですが、思えば色々なことがありました。個人的には、勤務して間もない元年7月、長年私を支え、家庭生活の中心的役割を担ってくれていた妻を失い茫然自失の状態に陥りました。この時、本学の皆様から暖かい励ましやお力添えを頂き、なんとか立ち直ることが出来ました。また、この9年間に2度も住居移転を経験し、最終的には生まれて初めてのマンション住まいに落ち着きました。更にまた、恥ずかしい事ですが不注意による鼓膜損傷で左耳の失聴というアクシデントに見舞われたこと、通教スクーリングで出張中に胆嚢炎に罹り、5日間の絶飲絶食というこれまでに無い経験もしました。その折々に、本学の皆様や教育センターの方々にご心配をおかけ致しました。

順序が後先になりましたが、公的には本学もこの間に通信教育の発足や大学院の設置など色々な変革がなされました。その中で平成6年度に発足した通信教育が、私には一番影響が大きかったと思います。そのお陰で3年も退職が延びましたし、これまでに無い新しい経験をさせて貰いました。確かに通信教育は大変苦労の多い仕事だと考えます。経験の無いこととて試行錯誤的な面が多く、実際の場面でも戸惑いの連続でした。特にスクーリングは、老年者の私にとって精神的にも身体的にも応える仕事でした。でも終わってみると、これはこれで懐かしく嬉しい思い出が沢山残りました。これまで未知の新しい地方を訪ね、それぞれの地域の風土や珍しい食べ物に接し多くの方々と知り合いになることが出来ました。

前任校からの勤務を合わせますと、46年間も教員生活を続けたことになります。お陰様であまり大きなミスも無く、この3月でやっと終止符を打つことが出来ました。何かほっとした気持ちというのが現在の心境です。お世話になった教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。有り難うございました。

# 退 任 の 辞

前教養課程教授　河　西　　章

丁度北大を3月に退官した年の4月に情報大学が発足したので、息つぐ間もなく引き続き教壇に立ち、諸会議にも参加した。最初はただ平行移動したような感じで、頭の切り替えがきかずに困ったが、間もなく違いがはっきりと感ぜられるようになった。研究室が格段に広く静かで、落ちついて本が良く読め、お蔭で懸案のパスカルの研究も予想外に捗った。また、ほぼ同じ位の建物に5千人近い学生がひしめいていた前の大学の教養部に比べて、1学年2百余人の学生数は教室をとても広く感じさせた。廊下や学外でも会うと挨拶してくれる諸君もいて、小規模校の利点に感銘した。教職員にも知り合いの方々が多く、また人数も少なくて気楽だった。2年経ち、3年経ち、学生数も次第に増し、教室も幾分か手狭に思われるようになり、図書室や食堂などの施設の拡充も必要だと思もわれはしたが、なお人間らしく動きまわれる空間は保たれている感じだった。依然として本も良く読め、気持ちもいつも前向きで、いい所に勤められてよかったと思い、友人たちにもそういいつづけた。やがて4年の「しばり期間」が終わり、幾分か自由に大学の将来が考えられるようになった時、「通信教育」の問題が持ち上がった。衛星放送を使っての授業という話と、道内で教職についていたり、家庭に入って主婦になっている何人もの教え子たちなどからしばしば聞かされていた、もう一度勉強をやり直したいという言葉とが頭のなかで勝手に結びつき、是非実現して欲しい、自分も参加しようという思いが強かった。実際には、電子学園傘下の専門学校の将来に係わる問題が計画の中心にあり、衛星放送も20単位に制限されていて、勝手に夢想していたような牧歌的なものでないことは間もなく分かったが、出不精で行けなかった土地に旅行する機会が出来たことを単純に喜んだ。これで学生数を水増しすることだけは避けられ、施設も大分改善される結果となったことがなにより有り難かった。しかし、数年前から一年ごとに体力・気力が減退しはじめ、次第に自分の限界が感ぜられるようになり、スクーリングでの出張も余り楽しくなくなってきて、年齢相応の引き時が来たのだと悟った。顧みると、当人は大変満足し感謝して勤め続けてきたが、周囲の皆様にはご迷惑をかけてばかりいたのではなかったかと反省され、今は心から皆様にお詫びして去ることにしたいと思うばかりである。

# 退任偶感

前経営学科教授　小田中　敏　男

私が本学に就任してから早いもので7年になろうとしております。非力ではありましたが、本学の創設のお役に立てたことを光栄に感じております。本学の発展のエネルギーはまことに目を見張るものがあり、あっというまにたちまち立派な会館が建設されましたのは最近のしるしであります。今後の御発展を切に祈りあげます。この機会に所感の一端を述べさせていただきます。

目下私は近所のコンピュータ塾に通っております。情報大学に勤務したのだから機械を動かせるようになることは教育、研究に必要なことと考えておりましたが、今日まで果たせませんでした。遅ればせながら退任を目前にして70の手習いと、ウィンドウズ95を習いはじめたのであります。実は今を去る30年以前カード式の機械時代にフォートランを血の出るような思いで習得しました。それも日本でなく米国でのことでした。然し帰国後15年程でカード式の機械は全く姿を消し、新式の機械には馴染めず、私は機械とまったく縁が切れてしまいました。しかし情報大学に就任し再び機械と関係するようになりました。コンピュータ程技術革新の激しい世界は他に見られません。その荒波にもまれた30年でした。

機械が数億もの算術演算を早くしかも正確に実行する能力は現代社会のあらゆる分野や考え方に深く影響を与えるようになってまいりましたことは皆様のご存知のところであります。機械の発達にともない人間の役割が創造性にあり、その開発が単に教育のみならず、現代人に課せられた課題となってまいりました。最近、教育の荒廃が叫ばれておりますが、その原因の一つが機械の発達の速度が早すぎて、人間性の開発が前者に追いつかない点にあるのではないかと愚考しております。人間が創造性のある仕事を担当するためにも機械による方法を理解する必要があります。すなわち人間の知的活動をすべて機械に代行させるのでなく、機械には繰り返しの仕事を行わせ、人間が創造性ある仕事を担当する。機械と人間の共生のみちをさぐることが求められます。これを解決する方法を本情報大学に期待するところ大であります。

最後に皆々様のご健勝を祈り、在任中のご厚誼に感謝申し上げます。

# これが私の最終講義

前情報学科教授　松　本　高　士

古稀定年退職。目出たいことです。みなさん慶んで下さい。

「人生は3段式のロケットだ」

これは、私の講義『自然科学概論』の第一声。9年間に17回喋ったはずだが、みなさん覚えているかしら。多分、もうお忘れでしょう。

折角いい講義をしても忘れたのでは勿体ない。それで今日は、みなさんが忘れたのを奇貨として、再履修。奇貨。ご存じあるまい。逃してはならないチャンスの意。

《しっかり勉強して、燃料をタンク一杯積んでおかないと、ロケットどころかおもちゃの花火。シュ、シュ、パチンでおしまいだよ。

いくら燃料は満タンといっても、10年も経てばタンクは空っぽ。このとき、うまく2段目ロケットに火がつくか。火がつかないと待っているのはリストラだけ。転職、また転職、いうなれば、うらぶれコース。

3段目への点火はもう10年先。無事に点火しないと、子供の学資がだせなくなる。「オヤジには高い授業料払って貰ったのに…」と嘆くこと必定。嘆くのは勝手でも、親にして貰ったことが子供にできないとなれば、これは下（ゲ）。親にして貰ったことが子供にできて、はじめて並》。

おわかりかな、大学生。厳しいね。さあ、どうする。

心配御無用。一に体力、二に気力。次は常識。成績なんか気にしない。

自助の精神を失わず、自分の足で歩くこと。貧に負けるな卑賤になるな。隣の芝生にゃ目をやるな。暗けりゃ灯りは自分で点ける。寒けりゃ、せめて薪は自分で割る。どんな仕事でも借方にはなるまいとする気概。これさえあればどこでも立派に世渡りできる。2段目でも、3段目でも、ロケットは無事に火を噴くこと太鼓判。思いだしたかな、迷講義。

翔んで下さい。輝いて下さい。みなさんは若いんだ。年賀状には返事をあげる。返事が来なくなったら先生は黄昏。こう思ってもほぼ間違いのないところ。

講義は、これでおしまい。さらばじゃ。どうぞ、みなさんお達者に。

# 退職にあたって

前教養課程助教授　福　田　都　代

私は平成元年の開学と同時に本学で勤務しました。以前は、国連という多国籍の官僚組織の末端の一員でしたので、新しい大学づくりのお手伝いをするということが、非常に新鮮な経験であり、この9年間をふりかえると実に感慨深いものがあります。教職についたのも初めてでした。それまで、人に教える仕事は、ユネスコ時代に発展途上国の図書館司書を研修で担当した以外にはありませんでした。9年間はまさに試行錯誤の連続で、反省すべきこともいくつかありましたが、本学の学生達や先生方との交流は日々新たな発見があり、喜びに満ちた思い出です。学生達は卒業後、時折私の研究室を訪ねてきますが、社会に出てからの彼らの成長ぶりを目にするのも私の大きな楽しみの一つとなりました。私の研究室は開学後、しばしば学生達のたまり場(時にサークルの部室代わり)と化していたことがあり、2階の研究室の先生方には騒がしくて大変ご迷惑をおかけしたようです。

この9年間にいろいろな出来事に遭遇しましたが、なかでも開学当初から大いに頼りとしてきた小林教授が平成6年夏に亡くなられ、また藤永助教授も平成8年秋から病に伏し、開学時から一緒に英語を教えてきた両先生が不在になってしまったことは大変な打撃でした。思いもよらぬ緊急事態でしたが、幸い3人の外国人の先生方のご協力とチームワークのおかげで、この2年間は何とか乗り切ってこられたと思います。また、本学では先生方だけでなく職員の方々にもいつも暖かく接していただいたことも忘れられません。

学生の皆さんに最後に言いたいことは、学生時代の人間関係を大事にしてほしいということです。利害関係のない学生時代の友人は生涯のよき友となる可能性が大いにありますし、指導教官をはじめとする先生方も折りにふれ、皆さんに適切なアドバイスを与えてくれることでしょう。これから21世紀に向かって、様々な分野や日常生活における情報化がいっそう進んでくることでしょうが、本学で学んだことを生かし、情報の波におぼれることのないよう、情報の収集・分析能力と判断力を養うべく、努力して下さい。

4月から、札幌市内にある北海学園大学の図書館学課程で、司書を養成する仕事につきます。本学の益々の発展と皆さんのご健康を近くからお祈りします。

# 異質のにぎわい

前経営学科助教授　田　中　祐　二

そこには、学際と自由の魅力があった。

言うまでもなく小さな研究棟に経営学科と情報学科、それに一般教養の教員が同居している。だから、いつも廊下ではいろんな分野の先生とすれ違うし、挨拶をする。また、立ち話もする。何がおもしろいか？たとえば本学の看板である「経営情報」ということにしても捉え方が見事に違う。それは当たり前、といわれればそれまでだが、そればかりでなく議論の運び方も違うように感じる。「みんな同じ意見」を持っている実に気持ちの悪い集団は別として、そうでないコミュニティのおもしろさは、off－line的状況を与えられて一気に具体化する。

つまり、学生も帰り去った学内のある一室（必ずしも決まった部屋ではない）で展開される。ここには自らの意見に対して利害関係の生じる規制力は何もない自由な環境がある。ジリリリーン！とけたたましく内線電話がなる。「先生、もし良ければどこかに寄りませんか？」。どこかとは野幌あたりの赤提灯と言うことである。「いえ、今議論好きが集まってワイワイガヤガヤやっているところです。もし宜しければいらっしゃいませんか？ビールもあることだし」という具合である。

何がおもしろいか？学際領域の様々な議論好きが自由な環境で（こんな環境を作れること自体が自由を享受する力かも知れない、とは言い過ぎか）、学生の今日の状況とそれに応じた指導方法、カリキュラムの編成、ゼミナール、あるいは学内行政について、さらに先の「経営情報」について（この分野に関しては学問論と深く関わるのでますます興味津々だ）、ワイガヤを繰り返すと実に充実したおもしろいアイディアが飛び交うものである。奇想天外とはまさにこのことである。これが、学際と自由のなせる技である。

わたしの栄養はこの類のものであったが、わたしにとってピカッと力強く光る小さな小さな石であり、しかも「飲み逃げ」と「食い逃げ」の一石二鳥であった。

ただ、この奇抜なアイディアを改革に結びつける方法を知らないのが残念である。off－line生産はモジュール化していない。

田中ゼミ新年会風景

# 本を読み、考え、流星を観察する

前経営学科助教授　上　野　継　義

わたしにとって思い出深い出来事を、研究と教育のそれぞれについて、ひとつずつ述べてみたい。

まず研究についていえば、イリノイ大学の図書館で決定的な史料『全国安全協議会議事録』に出会ったことである。まえからこの史料の存在自体は知っていたものの、それが有するアメリカ経営史上の意義の大きさは当初予想していたレヴェルをはるかに超えるものであった。この史料を読み進んだときの震えるような感動はいまでも忘れることができない。この研究は博士論文にまとめ、いくつかの章は各種学会誌に掲載した。近い将来、全編を推敲して一著に仕上げる予定である。

教育については、ゼミナールでの学生との出会いが楽しい思い出である。毎年春と秋に学生を山登りにつれていった、というよりも無理矢理わたしの趣味につき合わせたといった方がよいだろうか。なかには歩いている間じゅう不平を口にするものもいたが、一度このように突破口を開くと、学生たちはその魅力に気づいてくれるものである（あるいは、その場合もある）。かつての学生からニュージーランドで山登りをしているという国際郵便を受け取ったりすると、嬉しさもひとしおである。いつかまた山野をともにかけめぐり、流星を観察し、歓談したいものだ。

本誌を綴く学生諸君に、歴史家リュシアン・フェーヴルの言葉を贈り、別れの挨拶にかえたいと思う。「わたしは歴史を愛します。もし愛していなければ歴史家などになっていないでしょう。生活を二つに分けて、一つは愛情なしに片づける仕事にあて、もう一つは自分の深い欲求を満たすために取っておく――このようなことは自分が専門職業を選んだ場合、ことさら忌むべきことです。私は歴史を愛します。そこで本日わたしの愛するものについて諸君に語ることを、当然のことながらうれしく思います。」（『歴史のための闘い』より）

【註】標題はジョージ・オーウェル『パリ・ロンドン放浪記』の一節からとった。「着ているものはボロで寒かったとしても、本を読み、考え、流星を観察することができるのなら、彼自身が言ったとおり、その心は自由だったのである。」

# 北海道情報大学を去るにあたって

前経営学科講師　大　島　佳代子

この春、情報大学を退職し、奈良市にある帝塚山大学法政策学部に移ることになりました。情報大学には非常勤講師としての1年を含め5年間お世話になりましたが、今振り返ると、本当に「あっ」という間の歳月でした。学生諸君とは「憲法」「行政法」を通じて、法的にものを考えるための初歩的訓練をしてきたつもりでいます。卒業生を含めた27名のゼミ生諸君とは、日頃のゼミ活動や合宿等を通し、勉強だけでなく就職やプライベイトな問題など、多くを語りあうことができました。また、通信教育の印刷授業では顔の見えない学生相手に指導を行うことの難しさを痛感すると同時に、スクーリングでは会場の規模や雰囲気を考慮せずに行った講義で学生諸君から手厳しい批判を受け、マスプロ授業の方法を考えさせられました。教育活動の他にも、就職委員・学生委員としての学内委員会活動、学内共同研究、トロント大学（カナダ）への海外出張と様々な経験をしました。とりわけ、就職委員会では松本先生に議論を挑み（若気の至りでした）「就職の手引」の草案を作ったことは、今となっては楽しい思い出となっています。

情報大学は、今はまだ一学部のこじんまりとした大学ですが、専門の異なるバラエティに富んだスタッフから構成されているのが特徴です。ややもすると自分の専門分野の関係者とのつきあいに限られがちな私にとって、専門の違う人と話をし、仕事をともにすることは非常に新鮮で刺激的なことでした。そして、この思いは、是非、学生諸君にも味わってもらいたいと願っています。そのためには、教養課程、経営学科、情報学科の別に関係なく、多くの先生と、そして他学科の学生との交流を深める機会を今以上に増やして欲しいと思います。大学生活が充実したものとなるか否かは、自らの手にかかっています。講義の内容やコンピュータの操作が分からないとき、教室や実習室の知らない誰かに声を掛けてみてください（もちろん、先生に質問する手もあります）。ほんのちょっとの勇気で、学生生活が変わるはずです。そして、よく学びよく遊び、あなたたちの情報大学をますます発展させていくことを切に願っています。

# 北海道での6年間を振り返って

前情報学科教授　齋　藤　收　三

## 1．大学での6年間

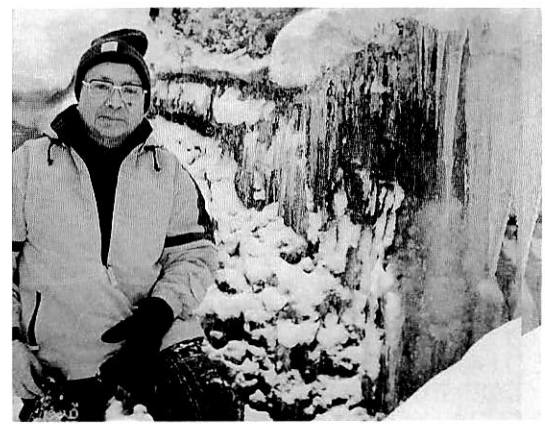
6年前に本学の「音声工学概論」を担当することになって、初めて札幌市民として生活するようになった。音声工学や音声情報処理の講義は、それまで大学院に限定されていたので、学部学生に通年で講義できることに新鮮さと魅力を感じたのである。学部レベルの科目なので、これまで修士課程で講義していた音声情報処理の講義内容に、ディジタル信号処理やスペクトル分析の入門を追加し、数理的背景や高度の専門的処理などは削除して講義を始めた。講義やゼミナールが順調に進むうちに、2年目からは学科主任の仕事、通信教育部の講義準備、それに大学院の設置企画の仕事が、次々と始まった。学科主任は松本教授の後任であったので、色々と学内情勢を教わるとともに、運営では林助教授に大変お世話になった。そして教育用コンピュータ設備の更新では中岡教授をはじめ電算機設備運用委員会委員の方々のご協力を頂いて、主任としての役目を終えることが出来た。

通信教育部は札幌生活の2年目から講義の準備が始まり、3年目に発足した。私の「音声工学概論」は4年目からの放送授業であったので、教科書作りを1年かけて行った。放送授業は3年間行ったが、授業の演出役を務めてくれた衛星教育センターの加藤氏には大変お世話になった。通信教育は始めての経験であったが、実際に授業を担当してみると、学生の中にはきわめて有能で、将来性のある人もいるが、受け身の勉強に終始する人も多い。通常の教室での教育では、講義内容の疑問点について学生同士が切磋琢磨することによって、教育効果が高められているので、このような環境作りを考えることが必要のように思われる。

大学院は高度の専門知識をもつ創造的な開発専門家を育成する教育機関であって、大学組織の中で最も大切な組織と考えていたので、この設置企画に参加できたことを大変嬉しく思った。幸い修士課程が順調に発足できたことはまことに喜ばしい。今後とも組織、設備の充実を図って発展して頂きたいと思う。

## 2．北海道での6年間

着任した4月はまだ寒くて驚いたが、5月には桜と梅の花が一度に咲き始め、ライラックの大きな花、ラベンダーの香る紫の丘と、北海道ならではの素晴らしい自然を楽しむことができた。2年目の8月には利尻、礼文、焼尻、天売の島々をはじめ、北海道内を車で観光してまわった。さすがに冬の1、2月は雪道が大変で、雪道の恐ろしさを体験した。幸い事故を起こすこともなく、良い思い出ばかりが残っている。また趣味のゴルフでは札幌周辺の数多くのコースを楽しむことが出来た。ゴルフでは山本助教授を始め、教職員の方々、情報通信技術研究所の方々とプレーを楽しむことができて、大変お世話になった。また札幌ではスキーをしない積もりであったが、授業の終わった今年に始めて歩くスキーを楽しんだ。添付の写真はサホロでのスナップである。6年間の北海道の生活を纏めると、「北海道万歳」に尽きる。どうもありがとう。



# トピックス

## ❀第6回学部卒業式並びに第1回大学院学位記授与式を挙行❀

3月19日(木)午前10時から平成9年度第6回学部卒業式並びに第1回大学院学位記授与式が本学体育会において挙行された。

今年度の学部卒業生は、経営学科114名、情報学科105名、計219名、又大学院研究科修了生は3名で、卒業証書は学長から経営学科代表の斉藤幸恵さん、情報学科代表の高橋輝世君に授与され、学位記は大学院研究科修士課程代表の蝦名朗太君に授与された。

学長告示、学校法人電子開発学園理事代表株式会社ＳＣＣ代表取締役社長松尾　泰氏の式辞に続いて学部卒業生を代表して経営学科の加藤健太郎君と大学院研究科修士課程修了生を代表して斎藤　一君が「どのような困難にも堂々と立ち向かって歩んで行く」と決意を述べ、巣立っていった。

## ❀学位論文公開発表会が行われる❀

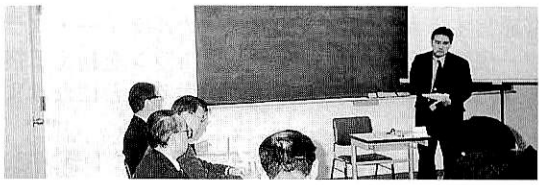
平成8年4月、本学に大学院経営情報学研究科（修士課程）が開設されて以来、始めての修了者となります3名の平成9年度学位論文公開発表会は、去る2月17日(火)、18日(水)の両日午後1時からゼミ室1において論文審査委員出席のもとに多数の教員・学生が参加して行われました。

大学院において、修士の学位を得るためには、2年以上在学し、30単位以上を修得して必要な研究指導を受けたうえ、大学院が行う修士論文の審査及び試験に合格しなければなりません。公開発表会はこの審査及び試験の一環として行われるもので、これまで自分が修めた研究成果を公開の場において発表するものです。

今回、本学にとっては記念すべき第1回目の公開発表会でしたが終始落ち着いた雰囲気の中で発表者と審査委員、参加教員等との間で活発な質疑応答が交されました。

公開発表を行った方々は次のとおりです。

会計情報学系列　蝦名　朗太
情報処理学系列　斎藤　一・柳川　建久



## ❀通信教育部初の卒業式が行われる❀

日本で初の衛星通信を活用した大学通信教育を開設したのは平成6年のことである。

爾来4年、初の卒業式は、4年前初の入学式を挙行した本学に隣接するＨｉｉＴの大スタジオにおいて、3月24日午前10時より行われ、その様子は衛星通信により札幌教育センターを始め9ケ所の教育センターに同時放映された。

第1回の卒業生は、正科生Ａ22名、正科生Ｂ640名の計662名である。

式には正科生Ａ11名のほか、各教育センターの代表9名も参列し、木下学長から各代表への卒業証書授与により開始され、次いで木下学長は告辞の中で「第1回の卒業生としての誇りと自信をもって社会にのぞみ職業人として真に社会に奉仕できる素晴らしい人格を作り上げて下さい」と激励、来賓として出席された、学校法人電子開発学園理事代表（株式会社ＳＣＣ代表取締役社長）の松尾　泰氏から「諸君は第1期生として大学の歴史を築いていくのです。21世紀はまさに諸君のこうした新しいかつ若々しい活力を求めています。初心を忘れずさらに自らを高め積極的な人生を追求し、生きがいのある素晴らしい人生を全うして下さい」と祝辞を述べられた。

最後に卒業生を代表し正科生Ａの平野眞智子さんから「正科生Ａは職業あるいは家事と学業との両立、正科生Ｂは専門学校と大学との学修の達成のため日々努力を重ねて参りました。第1期生であることを誇りとし本学の名を汚すことのないよう、未来のどのような困難にも諦めることなく堂々と立ち向かいます」と力強く決意を述べられた。

式の終了後、卒業生全員と学長始め関係者は通信教育部棟中教室に移動し用意された祝賀の場にのぞみ、4年間の思い出を振り返りながら和やかなひとときをすごしていた。

4年間試行錯誤の繰り返しであった通信教育部事務部の一同も、卒業生の晴れ姿にふれ一入感慨に浸っていた。

# 海外訪問記

## ―K．ラマヤ氏のこと―

経営学科教授　齋藤直機

私が、海外研修先の米国カリフォルニア大学バークレイ校に着いたのは、1994年9月1日のことでした。学生数3万名を抱える同大学の秋学期は、8月後半に始まっており、キャンパスは、米国内諸州や世界各国からの研究者や留学生を迎えて、既に賑わいを見せていました。

私は、インタナショナル・ハウス（通称I－House）―ロックフェラーⅠ世寄贈の寄宿舎で、世界70カ国から700名（内半数が米国出身者）を受け入れ、OBやOGには、経済学者J.K.ガルブレイス氏、現カリフォルニア州知事P.ウィルソン氏、日本人初の女性国連大使緒方貞子氏やウシオ電機会長の牛尾治朗氏がいます―の部屋の空きを待つことにし、その間、同大学のスタッフや維持運営するキャンパス内のファカルティー・クラブ―複数の多目的ホールやレストランを抱える宿舎兼用の倶楽部―に、仮住まいすることになりました。

その倶楽部滞在3日目に、私は、レストランで、インド人風の男性と話す機会を得ました。彼は、S.チャタジー氏―米国ボストン市内で偶然にも再会が実現した、オーストラリアのカーテン工科大学教授（本学学内報平成5年刊第35号にて紹介）―と雰囲気が酷似していることから、気になっていたところでしたが、互いに単身であるらしいことが手伝ってか、私達は、じきにテーブルを共にすることになりました。

彼の名前はカラマズー・ラマヤ氏、シンガポールのナンヤン工科大学教育学部で言語学を担当する教授、そして、彼が、勤務先では中等学校の英語担当教師の再教育をメインとする教授で、今回の研修では、ロンドン大学に4カ月滞在―タミール語の言語学的研究―の後大西洋を渡り、米国を東から西へ横断して米国西海岸のバークレイに辿り着き、同地には4カ月滞在の予定であることがわかりました。

私は、彼よりも10日ほど遅れて、I－Houseに引っ越すことになったのですが―部屋の両隣は、セビリア大学教授のディエゴ君（物理学専攻）とロンドンからの留学生マイケル君（芸術専攻）でした―、その後、彼が、翌年1月初旬に帰国する迄の4カ月間、私達は多くの時間を共にしました。彼は、彼の出身地であるタミール州の首都マドラス郊外のこと、そして、ご両親と一緒にシンガポールに移住した少年時代、そして、彼が経験した初等中等学校の教師時代、そして、現在の仕事や彼の信仰について興味深いことがらを数多く語ってくれました。

米国滞在中、彼は、2本の論文完成に奮闘中でしたが、そのうちの1本は、シンガポールにおけるインド系の言語教育の現状を紹介分析したもので、そこには、彼の母語であるタミール語を使用する最後の2校の中等学校に対して、その使用廃止の方針が打ち出されたこと、そして、それが、同国の経済事情を背景とするものであることが指摘されていました。

さて、ラマヤ氏のご家族は、夫人がインド出身、現在、シンガポールの小学校で算数を担当、上のお嬢さんは、英国ブリストルの大学で医学を専攻、卒業後はシンガポールに戻り小児科医となること、そして、下のお嬢さんは、シンガポール国内の大学の法科に進学、卒業してからはシンガポールの民間企業に就職予定であるとのこと、シンガポール経済の勢いが、就職事情も順調にさせているとのことでした。

その年の暮れに、ラマヤ夫人が単身で渡米、私は、彼女からのお土産の返礼に、その頃*Wall Street Journal*紙に紹介された、シンガポール国内の小学校に珠算教育を取り入れるという記事の切り抜きを提供しました。その後、彼女からは、「算盤を扱えない教師は、言語不適応の者同様、シンガポールを去る以外に方法はない。私は、それを習得する努力をする。」という、強い意志を込めた答えが返ってきました。夫人のこの発言と、ラマヤ氏の言〈彼の所属する学部が複数民族―中国系、インド系、英国系を中心とする―構成であることに由来する諸問題を抱えているとの〉を重ね合わせる時、それらは、日本に生まれ育った私

の想像を超える、きわめて厳しい内容でした。

翌年の1月末、ラマヤ氏とご家族は、4人お揃いでロサンゼルス経由で帰国、帰国直前に、彼は、3月末まで滞在予定である私のために、彼の友人であるシン教授—ヒンズー語担当の客員教授でターバンを巻いた長身の男性—を紹介してくれました。この出逢いは、異文化との出逢いとして大事にさせて頂きましたが、ラマヤ氏の帰国前に、次のようなこともありました。

11月中旬、I－Houseのダイニング・ルーム—中庭を抱える700名の収容能力を持つ—で、私がサンドーサ氏—インドネシア・ジャワ島スラカルタの国立芸術院教授でガムラン音楽の研究者・演奏家—と一緒の食事中に、I－House館長のルリー氏が同席を求め、私達に感謝祭への招待を伝え、さらに、大学院生数名を招待予定とのことでしたので、館長には、私達の共通の友人であるラマヤ氏の招待も要請しました。ルリー氏は、モントリオールのマッギル大学で文化人類学を修めた後、アフリカに5年間滞在して民族学的な調査研究に従事した後、I－House館長となった人で、アフリカの言語としては使用人口が多い、スワヒリ語を使いこなします。

感謝祭の当日、私達が館長宅に到着した時には、既に、ブラジル、ガーナ、スウェーデン、オランダ、オーストリア、インド、スリランカ、台湾出身の大学院生各1名が来ておりました。館長と館長夫人—上智大学で英語教育の経験をもち、現在、サンフランシスコ市内の私立大学教授でマスコミニュケーション論を担当—の手造りの料理をいただきながら、院生諸君は、米国の大学教育と研究環境との比較でお国柄を披露していましたが、次いで、サンドーサ氏の披露した、「米国式の教授法は私の母国では使えない」という教育体験談は、日本の教育事情と同様であるらしいことをうかがわせました。

話題は、その後、社会と家族関係に移りましたが、インドの家族関係を披露したラマヤ氏の話の内容は、ニューデリー出身の女子学生を驚かせました。父親を核とする封建的な家庭のイメージは、少なくとも、現在のインド都市部においては見られないとの彼女の抗議に続いて、院生諸君は、ラマヤ氏の家庭観が、戦後間もなくのインド農村部のものではとの疑問を呈したのでしたが、それに対して、ラマヤ氏が全く譲る気配を見せなかったことが印象的でした。

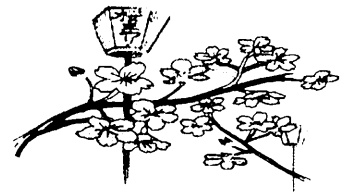
さて、この訪問記を閉じるにあたり、私の招聘について快諾を戴いた、カリフォルニア大学バークレイ校のオリバー・ウィリアムソン教授と同大学経営研究センター長D.ティース教授に、この場を借りて、あつく御礼申し上げます。また、ウィリアムソン教授担当の週2回の大学院講義と教授の主催する週1回のセミナー参加メンバーであった、大阪大学教授常木淳氏とサンカルロス大学P.アゼベド氏、日本銀行と郵政省からの若手研究者諸氏、そして、帰国後日本での再会を果たしたミュンヘン大学の若手研究者H.ディーテル氏の、公私にわたるご厚情を感謝します。

さらに、I－Houseにて巡り会い、やはり、日本での再会を果たした若手研究者C.ピヒラー君（ウィーン大学）とP.ベルグリンク君（スウェーデンのユメヤ大学）、アゼベド氏の同僚A.シルベイラ氏—ブラジル高速道路網のプランナー—、以上の諸氏に対しても同様の謝辞を申し上げたく存じます。

最後になりましたが、I－House OBのA.ヒブシューシ氏（サンノゼ州立大学マーケティング担当教授・ヘブライ大学客員教授）の研究上のご好意を感謝するとともに、現在もバークレイ校にて生物統計学の研究を続ける、北京大学出身の若手研究者でI－Houseのパズラー的存在、J.Jiangtian Chen（陳江天）君の大成を祈念します。

I－House館長宅にて：
ラマヤ氏(左)とサンドーサ氏(右)

# 卒業するにあたって



## ～ 卒業生からの一言 ～

§　この大学に来て一番辛かった想い出は就職活動です。
ですが、心優しい就職課の方々にお世話をいただいたお陰で、特に粂川さんと言う素敵な方がいたお陰で、見事に内定を得る事が出来ました。
本当に有り難うございました。

経営学科／三田村　悟

§　大学での一番の想い出は、硬式野球部での活動だった。
ここでの収穫は、自分にしっかりとした考えがあれば、自分の思い通りに、やらせてくれた監督がいたことだ。ここで学んだことは社会人になっても、きっと役に立つことでしょう。

経営学科／長谷川　健二

§　大学生活の４年間、アッ！という間でした。
大学の中でも色々なことを手がけ、貴重な体験をすることが出来ました。社会人になってからも、充実した毎日を送れるよう頑張りたいと思います。

情報学科／白田　壱巳

§　４年間、硬式野球部に所属し、３年生の時には三部リーグで優勝することが出来、充実した大学生活でした。後輩たちには「３部リーグ優勝」そして「二部昇格」を目指して頑張ってもらいたいです。

情報学科／後藤　毅

§　私は、小さな大学であることを生かし部活動などを通じて、学年に関係なくみんなと仲良くなることが出来た反面、充実しすぎて、忙しすぎた４年間でした。

情報学科／米澤　卓治

§　学業に、部活に、アルバイトに、とても充実した４年間でした。特に部活では硬式野球部に所属し、三部リーグにおいて優勝することができ、とても良い経験ができました。

情報学科／吉田　将拓

***本学の卒業生として活躍されることを期待しております！***

# ■ 平成９年度就職者データ ■

＜産業別就職状況＞

| 産業別 | 通学部 | 通信教育部 |
|---|---|---|
| 卸・小売・飲食業 | ３８．３％ | ２４．５％ |
| 情報産業 | ３０．６％ | ４５．７％ |
| サービス業 | １０．６％ | ８．０％ |
| 製造業 | ３．９％ | ９．４％ |
| 建設業 | ０．５％ | ２．８％ |
| 公務員 | ２．２％ | ０．９％ |
| 運輸・通信業 | ５．０％ | ２．７％ |
| 金融・保険業 | ６．７％ | ３．７％ |
| その他 | ２．２％ | ２．３％ |
| 計 | １００．０％ | １００．０％ |

（平成10年３月15日現在）

＜就職内容状況＞

◇　（通学部）

通学部に関しては、内定率94.6％（３月31日現在）となっており厳しかった平成９年度の就職状況も、例年との比較や道内における私大の様子から見ても、まずまずの成果を残すことが出来ました。

◇　（通信教育部）

卒業第１期生となる通信教育部の就職に関しては、当初心配されていた内定率も99.0％（３月31日現在）を上回る結果が出ており、通信教育における快挙となりました。

◇　今年度も国内における景気の低迷は依然として続いており、特に道内においては、引き続き厳しい経済状況及び就職状況が予想されております。

学生の就職に関しましては、より一層のご協力とご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

就職課

## ◆◇ 教職員の動向 ◇◆

### ☆ 大　学 ☆

◇教員人事◇

3月31日付退職

教　授　大野　公男（定年）
〃　室木　洋一（定年）
〃　金澤　甫（定年）
〃　松本　高士（定年）
〃　奥平　卓（定年）
助教授　福田　都代
〃　田中　祐二
〃　上野　継義
〃　大湯佐知子
講　師　大島佳代子

3月31日付任期満了

特任教授　村山　登
〃　河西　章
〃　小田中敏男
〃　齋藤　收三

3月31日付辞職

学　長　木下　重教

3月31日付辞任

学部長　三枝　武男
経営学科主任　長井　敏行
情報学科主任　西辻　昭

4月1日付採用

特任教授　大野　公男
〃　室木　洋一
〃　金澤　甫
〃　奥平　卓
助教授　高野　俊夫
〃　冨士　隆
〃　伊藤佐知子
講　師　藤井　敏史
〃　豊田　規人

4月1日付昇任

教　授　立花　峰夫
〃　浜渕　久志
〃　林　雄二
助教授　伊藤　公紀

4月1日付管理職

学　長　三枝　武男
学部長　久野　光朗
研究科長　金塚　高次
通信教育部長　西辻　昭
教養課程主任　立花　峰夫
経営学科主任　浜渕　久志
情報学科主任　中岡快二郎

◇事務職員人事◇

3月1日付配置換

就職課　事務局長付　山田　順一

3月31日付退職

会計課（図書係）　浅見　悦子

### ☆ 法人本部 ☆

◇事務職員人事◇

12月31日付退職

東京事務所　瀬沼　清美

3月1日付採用

東京事務所　小川　勝利

4月1日付採用

総務課　奈良　純子

## ◆◇ 1月～3月主要行事 ◇◆

### ☆ 大　学 ☆

1月5日(月)　新年交礼会
16日(金)　教授会
2月8日(日)　一般一期入試
13日(金)　教授会
20日(金)　臨時教授会
3月6日(金)　教授会
10日(火)　一般二期入試
13日(金)　教授会
19日(木)　卒業式
20日(金)　臨時教授会
4月1日(水)　辞令交付

### ☆ 通信教育部 ☆

1月8日(木)～12日(月)　後期印刷授業科目試験
23日(金)　第4回入学者選考
2月12日(木)～14日(土)　冬期スクーリング〈ニセコ〉
20日(金)　第5回入学者選考
3月13日(金)　第6回入学者選考
24日(火)　平成10年度　卒業式（第1回）
27日(金)　第7回入学者選考

## ◆◇ 広報活動 ◇◆

道新、タイムス等連合広告
2月15日～28日　テレビ・ラジオCM
2月19日～25日　ポスター地下鉄掲出

## ◆◇ 主な来校者 ◇◆

2月20日(金)　郡山北工業高校教諭　1名

## 編集後記

長野冬季オリンピックの感動と興奮がさめやらぬまま、いつしか日差しも春めいて、卒業、入学シーズンの到来である。先般の入学試験では道内の各私大が軒並み二割近い志願者減だったのに比べ、わが情報大学はほぼ去年並みを維持し、関係者のご苦労が報われた形となった。松尾記念館の工事も順調に進んでおり、新入生達が期待に胸をふくらませて正門をくぐって来る姿が今から待ち遠しく感じられる。その一方で一抹の寂しさを禁じ得ないのは卒業生と共に本学を去られる先生方が例年より多いせいであろうか。一度階段教室で講義を聴いてみたかった、あるいは一度階段教室で講義をしてみたかった、と思っている卒業生、先生方も中にはおられるかもしれない。一度も一緒に校歌を歌ったことがなかった、ということも心残りなことではある。ともあれ卒業生達に対しては今後の社会でのご健闘とご活躍を、去り行く先生方に対してはこれまでの本学へのご尽力に感謝し、今後の益々のご発展をお祈り致します。　(U)

北海道情報大学学内報
「ななかまど」第8号
発行日　平成10年4月1日
発　行　北海道情報大学
編　集　学内報編集委員会